

# 金融経済概観

## 金融市場動向

— 平成5年9月 —

(平成5年10月18日)

### 1. 公定歩合

日本銀行は、9月21日、公定歩合を0.75% (2.5%→1.75%) 引き下げることと決定し、即日実施した。

最近の経済情勢をみると、景気は設備投資、個人消費の低迷から依然停滞基調を脱していない。この間、物価は安定基調を一段と明確化し、対外収支面では大幅な貿易・経常黒字が続いている。金融面では、景況感の悪化や日本銀行による弾力的な市場調節の下、各種市場金利は低下傾向をたどっている。他方、貸出やマネーサプライは引き続き低い伸びにとどまっている。今回の措置は、以上のような状況のほか、為替相場の動向なども総合的に勘案し、わが国経済がインフレなき持続的成長の経路に移行していくプロセスをできるだけ円滑なものにするという趣旨に立って決定したものである。

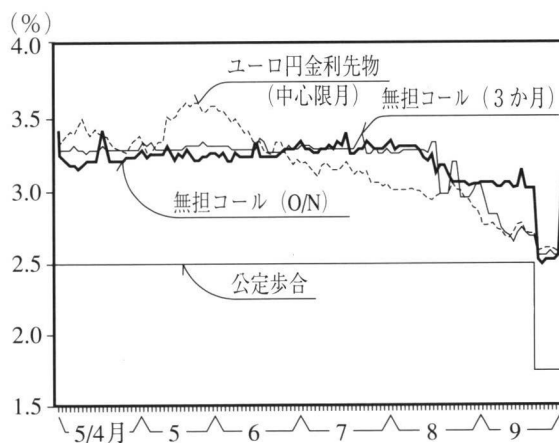
### 2. 短期金融市場

9月中のオーバーナイト・レート（無担コール）は、月央までは概ね横ばいで推移したが、下旬以降は公定歩合引き下げ等から急速に低下した（ただし、月末は期末要因から上昇）。また、ターム物レート、ユーロ円金利

先物（金利ベース）は、月中を通じて低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は44兆5,073億円と、前月（43兆532億円）を上回った。

短期金融市場金利



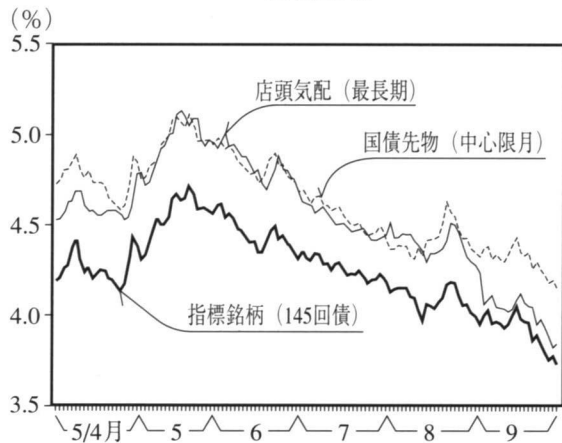
### 3. 資本市場

9月の国債利回り（145回債）は、公定歩合引き下げ等を背景に低下し、3.730%と昭和62年7月2日（3.695%）以来の水準（前月末4.015%）で越月した（国債先物中心限月4.149%＜前月末4.357%＞）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）

は前月を上回った一方、先物は前月を下回った。

既発債市場利回り  
—国債市場—



株式市況（日経平均株価）は、13日に21,148円と年初来高値を更新したものの、その後は決算対策の益出し売却がかさんだこともあって軟調に推移し、20,105円（前月末比△921円）で越月した。

また、株式出来高（東証第一部月中1営業日平均）は、3.06億株と前月（2.73億株）を若干上回った。

起債動向をみると、長期国債（10月債、10年＜価格競争入札分＞）は、クーポン・レー

トが前月債比0.3%引き下げられたものの、引き続き債券相場が堅調に推移するとの見方が強いことから、やや過熱気味の入札となった（9月28日入札分：募入平均利回り3.868%、応募倍率5.67倍）。短期国債については、6か月ものが順調な入札となったほか、3か月ものは落ち着いた入札結果となった（9月7日入札分＜6か月もの＞：募入平均利回り2.523%、応募倍率2.14倍、9月14日入札分＜3か月もの＞：募入平均利回り2.588%、応募倍率1.49倍）。

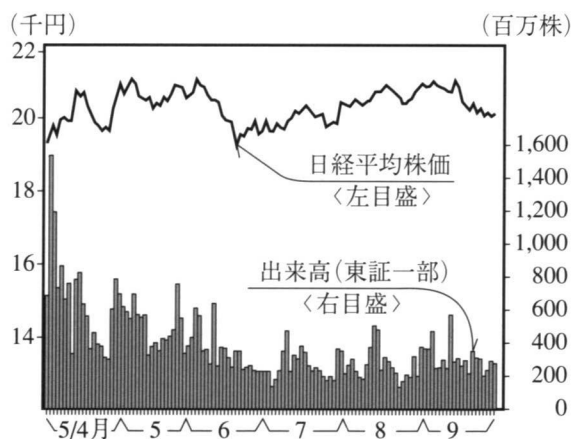
国内公募普通社債の発行をみると、債券相場の堅調な推移を背景に、発行額は既往ピーク（5年3月5,760億円）を更新した（8月1,000億円→9月5,950億円）。

国内エクイティ市場での発行（9月払込み分、増資は除く）は、前月を下回った（8月2,550億円→9月1,135億円）。

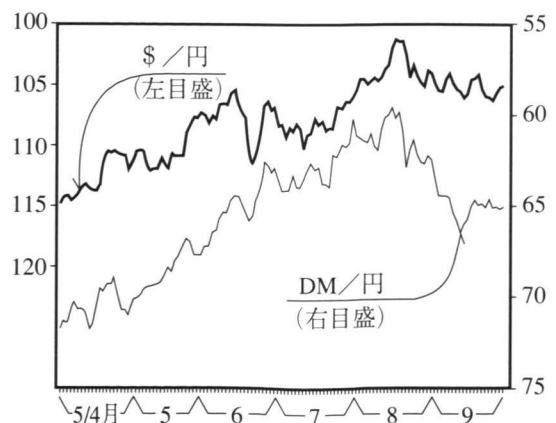
#### 4. 外国為替市場

9月の円相場（対米ドル直物相場、終値）は、月中を通じて横ばい圏内で推移し、105.10円で越月した（前月末104.18円）。また、

株式市場



外国為替市場

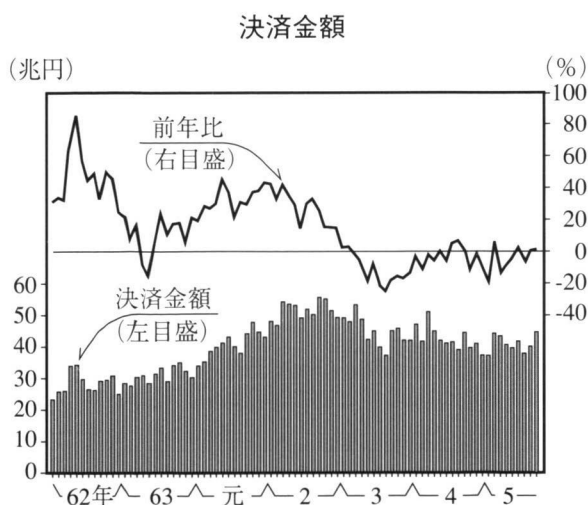


円の対マルク相場（ニューヨーク市場、終値）は、欧州通貨情勢の鎮静化等から月央にかけて下落し、65.05円で越月した（前月末62.47円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は171.7億ドルと、前月（165.3億ドル）を若干上回った。

## 5. 決 済

9月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、全銀システム取扱高、外為円決済交換高、日本銀行当座預金受払額はそれぞれ前年同月を上回った（全銀システム：前年比+6.8%、外為円決済：同+3.8%、日本銀行当座預金受払：同+13.3%）が、手形交換高（東京）は、前年同月を下回った（手形交換：前年比△7.1%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）は、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った（移転登録：前年比+9.9%、振込口座振替：同+23.9%）。



- (注) 1. 1営業日平均。  
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

## 6. 資金需給、金融調節

9月の資金需給をみると、銀行券要因が3,375億円の余剰（前年同月5,274億円の余剰）となった一方、財政等要因は、第3回普通交付税交付金の支払いや国債利払い等がみられたものの、保険、運用部の受入れ等がかさんだことから、8,217億円の不足（前年同月8,622億円の不足）となり、全体では4,842億円の不足（前年同月3,348億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B買戻し等により資金を供給した。

10月の資金需給（国債発行織り込み前）をうかがうと、銀行券要因については、3,000億円程度の不足（前年同月2,746億円の不足）となる見通しである一方、財政等要因は、厚生、国民年金の定時払い等がかさむことから、4兆3,300億円程度の余剰（前年同月4兆4,572億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では4兆300億円程度の資金余剰（前年同月4兆1,826億円の余剰）と予想される。

## 7. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

8月のマネーサプライをみると、 $M_2 + CD$ 平残前年比伸び率は+1.7%と前月に比べ0.1%ポイント上昇した。これは、通貨供給要因に則してみれば、財政のネット支払増を反映したものである。通貨種類別にみると、 $CD$ 、準通貨の伸び率が上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.0%と前月比横ばいとなった。

9月の銀行券平残前年比は+4.1%と前月比上昇した。

9月中の金融機関の預金・貸出動向をみる

と、預金平残（実質預金＋CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）前年比は、＋0.7%と前月より低下した。また、貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）前年比は、＋0.9%と引き続きほぼ横ばいでの推移となった。

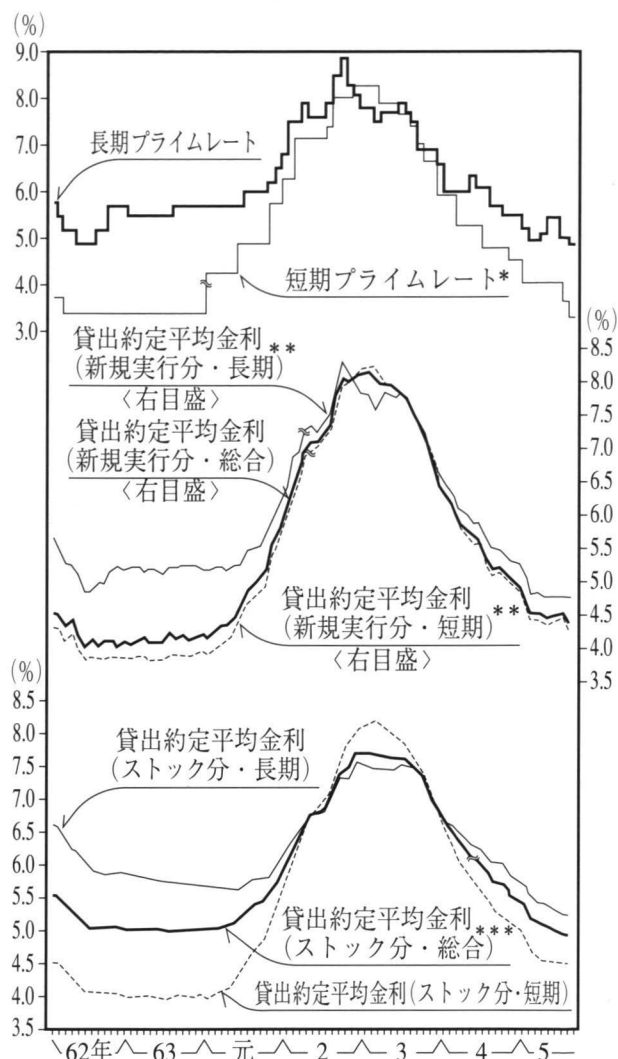
## 8. 貸出・預金金利

8月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分は、短期は都長銀の短期プライムレート引き下げ（31日、4.0%→3.75%）等から低下したほか、長期も長期プライムレート引き下げ（2日、5.4%→5.0%）等がみられたことからわずかながらも低下し（短期：前月比△0.121%、長期：同△0.001%）、総合でも前月比△0.106%低下した（7月4.493%→8月4.387%）。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに引き続き低下傾向をたどり（短期：前月比△0.041%、長期：同△0.033%、当座貸越：同△0.039%）、総合でも既往ボトムを2か月連続で更新し、初の5%割れとなった（総合：7月5.008%→8月4.975%）。

この間、8月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は、前月比低下した（7月2.904%→8月2.764%）。

貸出金利（全国銀行）



(注)\* 元年1月以降は都市銀行のなかで最も多くの数の銀行が採用した金利。

\*\* 2年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

\*\*\* 4年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)